

農業技術情報

令和4年7月5日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
J A 幕別町	0155- 54-4118
J A 札内	56-2131
J A 帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

各作物の生育・作業の遅速（幕別町7月1日）

（ ）内は平年値（※春まき小麦は暫定）

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早2	稈長 83.8(79.1)cm 穂長 8.3(8.7)cm 穂数 710(706)本/m ²	乳熟期 6/28(6/30)
春まき小麦 (はるきらり)	早5	稈長 89.2(77.3)cm 穂長 6.7(8.0)cm 穂数 767(724)本/m ²	出穂揃 6/18(6/21) 開花期 6/20(6/25)
馬鈴しょ	早1	茎長 59.4(62.3)cm 茎数 4.0(3.9)本	開花期 6/25(6/26)
大豆	±0	草丈 22.0(19.4)cm 葉数 3.3(3.4)枚	
小豆	±0	草丈 5.9(6.5)cm 葉数 2.3(2.3)枚	
菜豆(金時)	遅2	草丈 15.9(18.4)cm 葉数 2.4(2.6)枚	
てん菜(移植)	±0	草丈 49.2(51.8)cm 葉数 18.7(19.0)枚	
てん菜(直播)	早1	草丈 37.8(30.6)cm 葉数 14.7(12.5)枚	
牧草	遅1 (2番草)	1番草草丈 96.5(99.0)cm 2番草草丈 8.0(12.2)cm 1番草収穫期 6/25(6/24)	出穂期 6/14(6/12)
飼料用とうもろこし	±0	草丈 76.8(76.9)cm 葉数 10.2(10.0)枚	
たまねぎ	早1	草丈 67.1(59.5)cm 葉数 7.9(7.4)枚 葉鞘径 18.3(15.9)mm	

畑作

<小麦>

小麦類の登熟は平年より早く推移しており、稈長が長い傾向です。

1 赤かび病の防除

開花期間は日照時間も平年並みにあり、まずまずの受粉状態と考えられます。降雨が多かったことから、ニバーレ菌による葉枯症が発生しています。今後の発生状況・登熟状況に応じ適切な防除を実施してください。

表1 赤かび病の防除薬剤(赤さび病にも登録あり)

防除時期	薬剤名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
臨機(登熟期間)	チルト乳剤 25	3	1,000~2,000	3日	3回

2 アブラムシ類の防除

ほ場を確認し、要防除水準(およそ半分以上の穂に寄生が認められる)を超える場合は6/3付技術情報を参照し、薬剤防除を検討しましょう。

3 収穫作業に向けた準備

- ・コンバインによる収穫作業がスムーズに行えるよう、ほ場周辺の枝払いや草刈りを実施しましょう。
- ・ほ場内に雑草が繁茂している場合、倒伏の助長、他ほ場への種子の持ち込み等が懸念されるため、種草取りを実施しましょう。
- ・過去にソバを作付けたほ場や前作が春まき小麦の場合、収穫物にこれらの子実が異物として混入(コンタミ)する恐れがあるため、収穫前の抜き取りを徹底しましょう。

<てんさい>

最終中耕は遅れないよう、畦間が茎葉で覆われる前までに終わらしましょう。中耕時、株元まで土を寄せ過ぎると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。(防除の詳細は日甜ハガキ、「農作物病害虫防除基準」を参照してください。)

1 アブラムシの防除

町内てんさいほ場でアブラムシが多くみられています。テンサイ黄化病(西部萎黄病)の被害防止は初期防除が重要なため、防除を徹底しましょう。

2 ヨトウガの防除

幼虫が大きくなるにつれて薬剤の効果が低減するため、食害を確認したら速やかに防除しましょう。

表2 てんさいの害虫防除薬剤例

防除時期	病害虫	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
7月上中旬	ヨトウガ	ゲットアウトWDG	3A	3,000	14日	4回
		または ダズバン乳剤40	1B	1,500	45日	2回
	アブラムシ類	ウララDF	29	4,000	14日	2回

3 褐斑病の防除

6月後半が高温・多湿で経過したため、褐斑病の初発が早まっています。十勝農試の予察ほ(品種:「ライエン(抵抗性:やや強)」)で、6月28日(平年:7月5日)に初発が確認されました。町内で作付けされている品種は抵抗性が「やや強」以上ですが、予防防除を開始しましょう。

表3 てんさいの褐斑病防除薬剤例

病害虫	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
褐斑病	グリーンダイセンM水和剤 または グリーンペンコゼブ水和剤	M3	500	21日	5回

※褐斑病防除は連作・短期輪作ほ場や、被害茎葉を過去にすき込んだほ場、前作がてんさいの隣接ほ場がある場合などで実施しましょう

病原菌は30℃で7~8日、25℃で9~10日、15℃で19~21日間潜伏し、7~8月の高温多雨により急速に発生が広まります。若い葉は老葉に比べ病原菌の潜伏期間が長く、病斑数も少ないため、下位葉を中心に観察し、予防防除を徹底しましょう。

4 根腐病の防除

高温多湿条件で発生しやすくなります。菌密度が高まっている連作・短期輪作ほ場で未防除の場合は必ず防除を実施してください(薬剤は 6/17 付技術情報参照)。

<ばれいしょ>

6月後半は、降雨が続いたことや気温の急激な変化があったことにより生育のバランスが崩れ、一部葉ヤケ症状がみられます。病害虫が発生しやすい高温多湿環境にあるため、ほ場を観察し適期防除に努めてください。

1 疫病の防除

疫病は 10℃以上で活動を始め、最適気温 18~20℃の多湿条件で多発します。初発はまだ確認されていませんが、計画的に防除を行いましょう。特に、冷涼多湿な環境や水たまりのしやすい排水不良箇所、生育が過繁茂気味のほ場や風通しの悪いところ・山あい・防風林の影などでは発生しやすく注意が必要です。ほ場をよく観察し、基本は予防防除に努めてください。

2 夏疫病の防除

夏疫病は多湿と高温乾燥が繰り返されると発生が多くなります。疫病との同時防除で対応しましょう。

3 菌核病の防除

落下花卉が葉などに付着し、白色綿状のかびを発生し、そこから腐れが広がっていく病害です。低温多湿条件で発生し、多発すると早期枯凋させて被害をもたらします。発生が確認された場合、疫病との同時防除で対応しましょう。

表4 疫病の防除薬剤例(出典:くみあい農作物病害虫・雑草防除ガイド)

農薬名	RAC コード	使用濃度(倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)	効果の 発現	他対象病害	
						夏疫病	菌核病
フロンサイド SC	29	1,000~2,000	7日	4回	予防	○ 2000倍	○ 1000倍
プロポーズ 顆粒水和剤	40 M5	750~1,000	7日	5回	治療 予防	○ 1000倍	

※1 「フロンサイドSC」は 1,000 倍で菌核病に登録あり。花の落ちる時期に合わせて検討する。

4 軟腐病の防除

高温多湿条件が続く軟腐病が発生しやすい環境にあるため注意しましょう。初期防除の徹底に心がけ、また生育量に応じて散布水量を調節しましょう(薬剤は 6/17 付技術情報参照)。

5 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除

現在、他作物ほ場を含め広範囲でアブラムシ類の発生がみられています。ナストビハムシもみられています。雑草地や防風林近くでは特に注意し、発生状況に応じて防除を実施してください。

※薬剤防除の使用例は 6/17 付技術情報及び「農作物病害虫防除基準」を参照してください。

<豆類>

6月後半の高温により豆類の生育は回復しています。中耕など作業にあたっては遅れないよう心がけましょう。

1 最終中耕

遅い中耕や培土は、断根による養分吸収阻害の程度が大きくなるので、開花始 10 日前まで(7 月上中旬頃)には最終の中耕・培土を終えましょう。

2 小豆「茎疫病」の防除

連作ほ場や排水の劣る場所で発生することがあります。発病後の茎葉散布では効果が得られないため、今後の気象で大雨など発生が予想される場合は、予防防除や溝切りによる排水の実施を心がけてください(薬剤例は 6/17 号参照)。

3 小豆のツメクサガ・マメアブラムシ防除

ツメクサガ等の幼虫による食害被害(葉に不定形の穴があく、茎が折れて株がしおれるなど)が拡大する場合は防除を実施しましょう。

マメアブラムシは町内ですでに発生しています。ほ場で寄生が目立ったら、蔓延する前に部分防除を実施しましょう。

表5 小豆の害虫防除薬剤例

対象害虫	農薬名	RAC コード	使用濃度(倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
ツメクサガ	トクチオン乳剤	1B	1,000	30 日	2
アブラムシ類	モスピラン SL 液剤	4A	2,000~4,000	14 日	3
	ウララDF	29	4,000	7 日	2
アブラムシ類 アズキノメイガ	スミチオン乳剤	1B	1,000	21 日	4
	オルトラン 水和剤	1B	1,000	14 日	3

4 窒素追肥

根粒菌が行う窒素固定量は、豆類の生産性を大きく左右します。大豆>小豆>菜豆の順に根粒菌による窒素固定量が多く、根粒菌の着生量が少ないほど、追肥が必要となります(大豆の場合、開花期頃に引き抜いてみて根粒菌が個体当たり数個しかついていない場合が要追肥の目安)。

生育量や地力、根粒菌の着生と活性状況に応じて追肥の要否を検討しましょう。

表6 豆類の窒素追肥時期と追肥量の目安

作物名	追肥時期	追肥量の目安	備考
大豆	開花期頃	N: 2~4 (kg/10a)	生育後期に窒素供給が多いほ場では追肥量を減らす。
小豆	第3本葉展開期前後 (7月上中旬)		
金時	第2本葉展開~開花始頃		葉落ちが悪いほ場、生育後期に多量の窒素が供給されるほ場では追肥量を減らす。

野菜

気温が上がり、病害虫の発生が増えつつあります。今後も気象状況に応じた病害虫防除を実施してください。

<ながいも>

(1) 中耕と埋め戻し

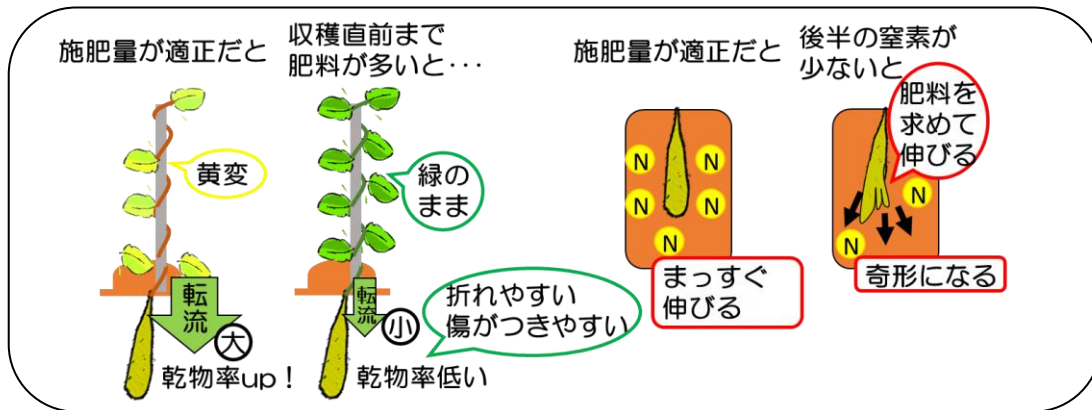
- ・この時期から根が畦間に伸び始めます。7月上旬までに中耕を終わらせましょう。
- ・トレンチャー溝の陥没が発生した場合は、早期に埋め戻しを行ってください。

(2) 除草剤の生育期処理

- ・畦間土壌処理は、茎葉(下葉)に飛散しないように行ってください。

(3) 分肥の施用時期

- ・分肥を行う場合は、7月下旬までに実施してください。
- ・とかち太郎は従来品種(音更選抜)よりも後半の生育が旺盛です。緩効性肥料を使用していない場合は、安定栽培のために分肥を実施してください。
- ・過剰な分肥や多肥ほ場における分肥は、黄変期の遅れによる乾物率低下の原因になります。分肥する際は基肥量も確認し、適正範囲内で実施してください。



<だいこん>

降雨後に気温が高くなると軟腐病の発生が多くなります。また、引き続きキスジノミハムシの発生にも注意が必要です。

軟腐病対策として、高温期は種作型の窒素施用量は、通常2~4kg/10a、肥沃なほ場では1kg/10a以下としましょう(平成14年普及奨励事項)。

(1) 軟腐病の防除

1回目の防除は、は種後25~30日頃に行いましょう。また、散布1週間後に2回目の防除を行うと効果的です。

表1 だいこん軟腐病の防除薬剤例

時期 (は種後)	薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用 時期	使用 回数	注意事項
1回目 (25日目)	Zボルドー	M1	500	—	—	・薬害軽減のため、クレフノン 200 倍を加用し、葉面散布剤との混用避ける。 ・高温多湿時の使用は避ける。 ・薬剤投入フィルターを外し、水を入れてから徐々に薬剤を入れる。
2回目 (30日目)	スターナ水和剤	31	1,000	収穫 14日前	5回 以内	散布時期に注意する(収穫予定日から逆算して確認)。

【銅を含む薬剤を使用する際の注意点】

- ・高温多湿条件や軟弱徒長気味に生育している場合は薬害発生の恐れが高まります。
- ・散布後に降雨が見込まれる時や、朝露が残っている時間帯の散布は、薬害発生につながる恐れがあります。
- ・薬害軽減対策として、クレフノン 200 倍を加用してください。

(2) キスジノミハムシの防除

は種時の粒剤施用に加えて、多発時には、は種後 20～30 日から茎葉散布防除を実施してください。

※薬剤については、「6月17日技術情報もしくは令和4年度農作物病害虫防除基準」を参照。

<にんじん>

(1) 軟腐病の発生に注意

高温多湿条件で発生しやすくなります。気象状況を確認し、防除を実施してください。

表2 にんじん軟腐病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	黒葉枯病	注意事項
Zボルドー	M1	500	—	—	○ (500～800倍)	表1参照
コサイド3000	M1	2,000	—	—	○ (500～1,000倍)	
カスミンボルドー	24	1,000	収穫 14日前	2回	○	
銅シン水水和剤	M1					
スターナ水和剤	31	1,000	収穫 7日前	3回		

<ごぼう>

(1) 分肥および中耕

緩効性肥料を使用していない場合は必要に応じて分肥を行ってください。分肥はは種後 60～70 日頃(本葉3～4葉期頃)土壌表面に施用し、除草を兼ねた中耕を行ってください。

<かぼちゃ>

(1) 果実斑点細菌病の防除

多湿条件下で発生しやすいため、開花7日前頃から、予防的に防除を実施してください。

【主な症状】

葉 : 水浸状の小斑点、降雨が続くと葉脈に囲まれた病斑となり、中心部が破れる。

葉の縁から水浸状に変色して、やがて黒褐色になり枯れ上がる。

つる : 水浸状に陥没し、やがて白色の紡錘状病斑となる。

果実 : 始め幼果に水浸状でやや陥没した病斑を形成、やがて周囲が隆起する。

表3 かぼちゃ果実斑点細菌病の防除薬剤

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	注意事項
Zボルドー	M1	500	—	—	表1参照

(2) アブラムシの防除

本年はアブラムシの発生が早く、すでに発生が確認されています。防除の際は、ミツバチへの影響を考慮してミツバチへの影響が少ない薬剤を選定しましょう。

〈注意点〉

- ・ミツバチを導入する場合は導入前に、ミツバチへの影響が少ない薬剤（マブリック水和剤20、ウララDF）で1度防除を実施してください。
- ・ミツバチ導入後は、活動に影響の少ない薬剤（マブリック水和剤20、ウララDF）を選択し、活動が活発な時間帯（午前8時～12時）の散布は控えてください。

表4 アブラムシの防除薬剤例

使用時期	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
着果前	マブリック水和剤	3A	4,000	収穫21日前	2回以内
～着果期	ウララDF	29	2,000～4,000	収穫7日前	2回以内
着果後	エルサン乳剤	1B	1,000～2,000	収穫3日前	3回以内

〈レタス〉

降雨後に気温と湿度が高くなると、軟腐病や腐敗病、ナモグリバエなどの病害虫の多発に注意が必要です。

(1) 軟腐病、腐敗病の防除

軟腐病および腐敗病の防除は、特に降雨や強風の直前と直後に行いましょう。

表5 レタス軟腐病、腐敗病の防除薬剤例

時期	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	備考
降雨直前	スターナ水和剤	31	2,000	収穫7日前	2回以内	
降雨前後	カセット水和剤	31 24	1,000	収穫7日前	2回以内	
降雨後	バリダシン液剤5	U18	800	前日	3回以内	すそ枯病登録あり

(2) ナモグリバエの防除

今後、成虫の発生が多くなるため注意が必要です。

※薬剤については、「6月17日技術情報もしくは令和4年度農作物病害虫防除基準」を参照。

〈キャベツ・はくさい〉

(1) コナガの防除

- ・定期的な防除を実施してください。
- ・コナガは薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統殺虫剤の連用は避けましょう。特にジアミド系薬剤（RACコード：28）は道内でもすでに薬剤抵抗性をもつ個体が確認されているため、1作型に1回の使用に抑えてください。

※薬剤については、「令和4年度農作物病害虫防除基準」を参照。

(2) 軟腐病の防除

- ・キャベツは、結球前から防除を行ってください。

表6 キャベツ軟腐病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	注意事項
Zボルドー	M1	500	—	—	・結球期以降は使用しない ・表1参照
スターナ水和剤	31	1,000	収穫7日前	3回以内	スターナとカセットの使用回数は、合わせて3回まで。
カセット水和剤	31 24	1,000	収穫7日前	3回以内	

- ・はくさいは、定植10日後から早期に予防的防除を開始して、その後は1週間ごとに実施してください。

表7 はくさい軟腐病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	注意事項
Zボルドー	M1	500	—	—	表1参照
アグリマイシン 100	41 25	1,500~3,000	収穫14日前	3回以内	—
スターナ水和剤	31	1,000	収穫7日前	3回以内	スターナ、マテリーナの 使用回数は、合 わせて3回まで。
マテリーナ水和剤	31 25	1,000	収穫14日前	3回以内	
バリダシン液剤 5	U18	500	収穫3日前	3回以内	—

・散布水量は、定植～結球初期までは150ℓ/10aで、結球期以降は200ℓ/10aで防除を行ってください。

(3) べと病の防除

気温が20℃以下で降雨が続いた場合、べと病が発生しやすくなります。降雨前に防除を実施してください。

表8 べと病の防除薬剤例

薬剤名	作物名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
ダコニール1000	キャベツ	M5	1,000	収穫14日前	2回以内
	はくさい			収穫7日前	
ランマンフロアブル	キャベツ ・はくさい	21	2,000	収穫3日前	4回以内
レーバスフロアブル	キャベツ ・はくさい	40	2,000	収穫7日前	3回以内

(4) チップバーンの発生に注意

降雨後の高温等で急激に生長が進むとカルシウムの吸収が追いつかず、チップバーンが発生しやすくなります。品質低下を防ぐために、予防的にカルシウムの葉面散布を実施してください。

<たまねぎ>

ネギアザミウマおよび白斑葉枯病の発生が見られます。茎葉が増えているため、防除の際は散布水量を増やしましょう。

(1) ネギアザミウマの防除

一部で密集して寄生している株が確認されています。引き続き注意が必要です。

表9 ネギアザミウマの防除薬剤例

時期	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
7月1週	ディアナ SC	5	2,500~5,000	収穫前日	2回以内
7月2週	トクチオン乳剤	1B	1,000	収穫7日前	4回以内
7月中旬	ファインセーブ FL	34	1,000~2,000	収穫3日前	3回以内

(2) 白斑葉枯病・小菌核病の防除

十勝東部管内で6月下旬から白斑葉枯病・小菌核病の発生が確認されています。

(3) 軟腐病・りん片腐敗病の防除

多湿条件下で、25度以上の高温では軟腐病、18度前後の比較的低温ではりん片腐敗が発生しやすくなります。降雨前に予防防除を実施してください。

(4) べと病の防除

過去にべと病が発生したほ場では、予防防除を行ってください。

表 10 たまねぎ病害の防除薬剤例

時期	薬剤名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期	使用 回数	白斑 葉枯病	小菌 核病	べと 病	軟腐 病
7月 1週	アグレプト液剤 ^{※1}	25	1,000	収穫 7日前	5回 以内				○
	コサイド3000	M1	1,000～ 2,000	—	—				○
	ファンタジスタ 顆粒水和剤	11	2,000～4,000	収穫前 日	5回 以内	○	○		
7月 2週	ミリオネア フロアブル	7	4,000	収穫前 日	4回 以内	○	○		
	コサイド3000	M1	1,000～2,000	—	—				○
7月 中旬	フロンサイドSC	29	2,000	収穫 3日前	5回 以内	○		○	
	コサイド3000	M1	1,000～2,000	—	—				○
臨機	グリーンダイセン M 水和剤 または グリーンペンコゼブ水和剤	M3	400～600	収穫 3日前	5回 以内	○		○	

※1 ストレプトマイシンを含む薬剤の総使用回数は、5回以内。

～農薬の安全使用と農作業事故防止に努めましょう～

- ★ 農薬散布において、「農薬の安全使用基準」を遵守し、散布の高さを低くし周辺作物への飛散防止に努めましょう。
- ★ 散布時は、必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかり覆うようにしましょう。
- ★ 散布が終わったら、肌の露出部を良く洗い、うがいをしましょう。
- ★ 作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。
- ★ 水分をしっかりとり、熱中症に注意しましょう。